第1章　浅川伯教・巧の心と眼

1910年の日韓併合後、13年にまず伯教が、その翌年に巧が朝鮮に渡りました。おそらく兄弟もまた、新天地にあらたな生活の場を求めたのでしょう。小学校の教師となった伯教は、はじめは朝鮮の地に違和感を感じますが、道具屋の電灯のもとに置かれていた白い大きな壺を目にしたことから、朝鮮白磁の世界へ足を踏み入れることになりました。そして、朝鮮時代の陶磁をはじめて時期区分する、画期的な論文を発表します。

一方の巧は、朝鮮総督府の林業試験所に勤務しつつ、木工品の膳を美術工芸品として取り上げた著作や、また各種陶磁器の名称と用途とを解説した著作を残します。ただ残念ながら、肺炎のため1931年に急逝しました。

浅川兄弟は、朝鮮在来のものを大切にしようとしたことがおおきな特色としてあげられます。

白磁壺
大阪市立東洋陶磁美術館（鈴木正男氏寄贈）

朝鮮陶磁写生図　紙本墨画　大阪市立東洋陶磁美術館（鈴木正男氏寄贈）

第2章　朝鮮民族美術館の設立

そのようなかれらは、「人々に朝鮮の美を伝え」（柳宗悦）るため、1924年に京城（現ソウル）に、美術工芸品のための朝鮮民族美術館を設立します。日本民藝館より12年も早い開館となりました。柳は資金集めのために講演会や音楽会を開き、また巧は、すでに数年にわたって収集していた工芸品を提供し、給料をすべてそこにつぎ込むようなこともありました。ここには、朝鮮の人たちの生活に付随し、生活の道具であったものは何でも集められていたといいます。

青花鉄砂葡萄栗鼠文壺
日本民藝館　朝鮮民族美術館旧蔵

第3章　浅川兄弟が愛した朝鮮陶磁

浅川兄弟が朝鮮半島に渡ったころ、朝鮮時代の陶磁器はあまり評価されていませんでした。それにたいして伯教は、朝鮮陶磁には独自の美しさがあり、むしろこれこそが朝鮮民族固有のものを表出していると主張しました。さらに伯教は、「支那のものは理性が勝って居るが朝鮮のものは人情味が勝って居る」、「暖かき力と呼吸」を感じるといい（浅川伯教「李朝陶器の価値及び変遷に就て」『白樺』1922年9月号.2頁）、巧もまた、水滴を手に収めれば「温まりを感ずる気がする」、「陶工等が規則を忘れて自由に手を伸ばして作ったものにのみ美しい作がある」といいます。二人は朝鮮陶磁のなかに、作為を排した素朴な暖かさを見てとったのでしょう。

朝鮮民族美術館は、そののち浅川兄弟が管理していましたが、戦後の1946年に伯教はその収蔵品と自身の収集品を、韓国側に渡したといいます。

青花窓絵草花文面取壺
大阪市立東洋陶磁美術館（安宅昭弥氏寄贈）
浅川巧旧蔵

✦ 学芸員のおススメコレクション ✦

大阪市立近代美術館（仮称）　アンティーブ、朝

ポール・シニャック「アンティーブ、朝」1919年作
なにわの海の時空館蔵（大阪市立近代美術館建設準備室寄託）

この作品に描かれたアンティーブはフランス南部の地中海に面した街で、作者のシニャックは1913年よりここに暮らしました。陽光あふれる海辺の風景が、水面の反映とともに描かれています。シニャックは印象派の流れを汲み、科学的な色彩理論を取り入れた新印象主義の画家です。しかし1880年代末にはその様式から抜け出し、点描技法ではなく、より自由な、モザイクのようなタッチで水辺の風景を好んで描くようになりました。彼は自ら船を操るヨットマンでもあり、ヨーロッパや地中海各地へ航行し、そこで出会った風景を絵にしました。（大阪市立近代美術館建設準備室学芸員　清原佐知子）

※今回紹介した絵画は、大阪市立近代美術館（仮称）心斎橋展示室で開催中の「大阪市立近代美術館展覧会　海と水のものがたり —シニャック、福田平八郎から杉本博司まで —」に出品されています。＜6/19（日）まで＞

大阪市立近代美術館(仮称)心斎橋展示室　住所 〒542-0081 大阪市中央区南船場3-4-26 出光ナガホリビル13階（旧出光美術館大阪）　TEL 06-4301-7285　FAX 06-6644-4894（ともに大阪市総合コールセンター）
アクセス　地下鉄「心斎橋」または「長堀橋」クリスタ長堀 北7番または北5番出口すぐ
ホームページ　http://www.city.osaka.lg.jp/yutoritomidori/page/0000009428.html